



# UU now

発行：宇都宮大学 編集：広報室  
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350  
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026  
URL <http://www.utsunomiya-u.ac.jp>  
E-mail [plan@niya.jm.utsunomiya-u.ac.jp](mailto:plan@niya.jm.utsunomiya-u.ac.jp)

Vol.19

## 存在意義を確認する



### OB INTERVIEW 若者に新聞の価値を伝えたい

読売新聞東京本社 執行役員販売局長

**石川 明**  
Ishikawa Akira

【いしかわ あきら】1948年、栃木県国分寺町（現下野市）生まれ。66年、県立宇都宮高校普通科卒。70年3月、宇都宮大学農学部農業経済学科卒。同年4月、読売新聞社入社。同年10年、販売局開発部企画課。86年、ニューヨーク支局駐在。91年、販売局販売3部課長。92年、販売局販売3部次長。95年、販売局管理部長。98年、販売局販売3部長。2000年、読売新聞西部本社販売局次長。01年、読売新聞西部本社執行役員販売局長。07年、読売新聞東京本社執行役員販売局長。

読売新聞に入社以来、一貫して販売畑を歩んできた。念願の発行部数日本一、そして1000万部達成。読売躍進の渦中に籍を置き、厳しくも確かな手応えを感じる仕事に携わる中で、「自分の存在意義を確認できた」という石川さん。いま、若い人の新聞離れを危惧する。

**読売の躍進とともに歩む**  
農学部からジャーナリズムの世界へ。宇大OBの中では、異色の存在である。  
入社当時は、米の生産調整や自主流通米制度の導入など農業政策の大きな転換点にあり、食糧管理特別会計は赤字が増大。農業を取り巻く環境は激動の時代だった。  
「新聞社になんか来ている暇はないだろう。もっと大学で勉強したことを生かせる農業関係の仕事のほうが、君には

なことを随分思った」。その迷いも、やがて消える。  
入社以来、販売部数で後塵を拝していた朝日新聞社を77年に追い抜き、94年には大台の100万部を達成し、新聞発行部数世界一の座へ。その間、アメリカに5年間滞在し、アメリカ在住の日本人に新聞を読んでもらうため、東海岸から西海岸まで大陸を奔走した。ちょうど通信衛星を経由してデータを海外

に送信し、現地で新聞を印刷するという時代の始まりだった。ダイナミックな会社の成長と新聞業界の発展を肌で感じる事ができた。  
「たいへんだけれども、仕事をやっている、自分の存在意義を感じられるときがある。それは、どんな会社でも言えることだと思ふ。それ以降、迷いはなくなった。」

**銀座に「宇大倶楽部」を**  
月夜の晩でも傘がある……。学生寮の話の中で、石川さんの口からふと出た「宇都宮大学コチャエ節」の一節である。「私の在学中、周りはいわゆる全共闘世代。卒業して40年。あつという間でした」と当時を振り返る。宇都宮高校ではラグビーに没頭し、宇大時代は、映画研究会に籍を置いた。部室は講堂の中にあつた。在学中2本の8ミリ映画を製作し、学内で上映会を開いた。自らは主役を演じ、宇都宮市内のデパートでロケしたことを記憶している。  
読売への入社も、映研の先輩との出会いがきっかけだった。3学年上で同じ農業経済専攻、卒業後読売に入社し、記者となつた先輩に「感化された」という。「大学時代、いろんな先輩の下宿を渡り歩き、酒を飲んだりしながら朝まで話し合った。その中で、読売に行った先輩に人間的な魅力を感じた。考え方なのか、何だったかは、よく分からないけど、共鳴したんでしょうね。漠然と、先輩の後を追いかけてよと思った。」  
その秋田出身の先輩は読売を退社したが、現在も交流が続いている。他の映研時代の懐かしい仲間とも、昨年、那須塩原市で開かれた同窓会で、久しぶりに

再会した。  
「宇大の卒業生が全国に散らばり、いろんな仕事に就いていくといいね。人脈も広がる。宇大倶楽部のようなものを銀座のど真ん中につくって、いろんな職業のOBが集まる。そんな時代が来れば、もっと楽しくなると思ふ。」

**裸足で土の感触を確かめたほうがいい**  
いま、新聞業界は販売部数の伸び悩みという厳しい状況にある。特にインターネットの浸透で、若者の新聞離れが進んでいる状況を心配する。  
「大げさだと言われるかもしれないが、新聞を読まない人たちが増えると、『ちよつと危うい』という思いがある。大学の先生の話では、学生は自分に興味のあるものだけをネットで調べ、興味がないことは一切調べようとしないという。」  
政治・経済から文化、スポーツまですべての情報が満載されている新聞の価値を、若い人たちに伝えていきたいという。  
「私は毎朝、新聞を読んでいる親爺の姿を見て育つた。いまの若い人にも、そんな光景を見せてあげたい」と微笑む。  
「（映研の先輩を追って）できれば編集でやっていきたいという気持ちがあつたかもしれない。でも、読売に入社を決めたときには、そういう想いは、まったくなかった。農業じゃないけど、靴を履いてコンクリートの上にいるよりも、いつも裸足で土の感触を確かめていたほうがいい。たぶん、そういう感覚は、学生時代に培われていたんじゃないかな。編集の記者と我々とは地面との距離が違う。間違いなく我々営業マンのほうが、地面に近いところにいる。」